

令和元年6月19日現在

機関番号：24403

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13489

研究課題名(和文) 自閉症スペクトラム障害における優れた記憶および想起の特徴についての探索的研究

研究課題名(英文) An exploratory study on the features of exceptional memory in autism spectrum disorders

研究代表者

川部 哲也 (Kawabe, Tetsuya)

大阪府立大学・人間社会システム科学研究科・准教授

研究者番号：70437177

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：自閉症スペクトラム(以下ASDと略記)の人が有する優れた記憶に着目し、大学生への質問紙調査と面接調査、文献研究、事例研究を行った。その結果、大学生の記憶の特徴とASDの人の記憶の特徴が明らかになり、両者の共通点と相違点について検討された。主要な結果としては、定型発達者もASDの人と同様の優れた記憶を有する可能性が示されたこと、ただし記憶の保持過程が異なる可能性があることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自閉症スペクトラム(ASD)の人の記憶機能の独特さについて、これまで当事者研究などによりエピソード的に報告されるに留まっていたが、本研究において調査研究を実施することにより、統計的に検証することができ、これまでにない客観的データを得ることができた。また、記憶時と想起時における記憶の「主観的感覚」を尋ねることにより、質的データを得ることができた。統計的分析と質的分析を通して、ASDの人が有する主観的体験世界を把握するポイントを明らかにすることができた。これらの知見はASDの人への心理療法的アプローチに有用な視点を提供できると考えられる。

研究成果の概要(英文)：We researched about exceptional memories in Autism Spectrum Disorder(ASD). Questionnaire surveys for university students, interview surveys, literature studies, and case studies for ASD were conducted. As a result, the characteristics of memory of university students and ASD people were clarified, and the common points and differences between them were examined. The main results were that Typical Development people may also have the same exceptional memories as those with ASD, but the memory retention process may be different.

研究分野：臨床心理学

キーワード：自閉症スペクトラム障害 記憶 自伝的記憶 大学生 質問紙調査 面接調査 優れた記憶

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、心理臨床において成人の自閉症スペクトラム（以下 ASD と略記）の人に会うことが多くなってきたと言われている。精神科医や心理療法家の多くもそのような実感を持っている。ASD の中核は「主体性のなさ」であり、自己の再構築を促すような従来の心理療法の前提が通用しなくなっているという指摘がなされている（河合，2010；広沢，2015）。ASD に対する心理療法研究は、これまで事例研究が主流であり、それぞれに有効な視点が見出されているものの、ASD 者が生きている主観的体験世界を調査研究したものはなかった。そこで本研究は、記憶という観点に着目した。Kanner(1943/1978)の症例ドナルド、Asperger(1944/2000)の症例フリッツに既に描かれているように、ASD 者は時に優れた記憶を有していることが知られており、記憶に着目することは有用であると考えられた。ゆえに本研究では、定型発達者と ASD 者それぞれの「優れた記憶」に関して検討を行うことにより、ASD 者が体験している世界を明らかにしようと試みたものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、定型発達者と ASD 者それぞれの「優れた記憶」の様相を明らかにし、その差異を検討することにより、ASD 者の体験世界を明らかにすることであった。その際に、記憶の分量という量的側面のみならず、記憶の内容や記録・保持・想起の3つの段階の様相など、質的側面において、定型発達と ASD には差異が存在するのかどうか、検討を行うこととした。調査実施にあたっては、大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科研究倫理審査委員会の承認を得た。

3. 研究の方法

初年度から最終年度にかけて、3つの調査研究および文献研究、事例研究を行った。以下に実施した研究を挙げる。

(1) 調査内容の考案 (2016 年度)

ASD 者の優れた記憶を測定するための調査内容を考案するために、初年度には知能検査および発達障害関連の心理検査内容の精査を行った。また、ASD 当事者が書いた自伝を文献研究し、ASD に特徴的な記憶の特徴を把握した。自伝的記憶の一般的特徴の研究成果も参照し、調査内容の考案に活用した。

(2) 大学生への質問紙調査 (2017 年度～2018 年度)

(1)を踏まえて「優れた記憶」の内容と量的特徴を問う質問紙調査を作成した。具体的には、「あなたが人よりもたくさん覚えていると思うもの」を最大5個まで記入してもらい、それぞれ何個覚えているか、それぞれどの程度人よりも多く知っていると思うかを4件法で問うた。また、ASD に特徴的な身体感覚を測定する AASP (日本版青年・成人感覚プロファイル)、ASD 的な認知特徴の度合いを測定する AQ-J-10 (自閉症スペクトラム指数 10 項目版)への回答を求めた。ASD と比較するために、定型発達が想定される大学生を対象に質問紙調査を実施した。調査協力者は大学生 301 名 (平均年齢 19.94 歳、SD1.45；男性 156 名、女性 141 名、性別無記入 4 名)であった。

(3) 大学生への面接調査 (2017 年度～2018 年度)

(1)を踏まえて「優れた記憶」の質的側面を問う面接調査内容を決定した。a)大学生の「優れた記憶」を具体的に聴取し、その記憶の専門性について尋ね、b)「優れた記憶」を想起・記録する際に用いた方略および想起時の身体状態、多く記録するに至った理由や背景を尋ねた。(2)の質問紙調査参加者の中から面接調査協力に同意してくれた大学生 11 名に半構造化面接を行った。

(4) ASD 者の自伝についての文献研究 (2016 年度～2017 年度)

ASD 者の自伝 (Grandin, T., Williams, D., 森口奈緒美、藤家寛子、ニキ・リンコ、綾屋紗月、東田直樹)の文献研究を行った。

(5) 臨床心理士への面接調査と事例研究 (2016 年度～2018 年度)

ASD の心理療法経験のある臨床心理士 1 名に対して、ASD 者のもつ記憶についての面接調査を行った。また、初年度から最終年度まで継続して、発達障害の疑いのある臨床事例を担当している臨床心理士を呼び、月 1 回の事例検討会を実施した。さらに、研究者自身の臨床事例から検討を行い、ASD 者の優れた記憶について考察した。

4. 研究成果

(1) 質問紙調査の結果

まず、大学生の優れた記憶がどのようなカテゴリーに属しているかを分類し、量的に分析を行った。結果、表 1 より、大学生の優れた記憶は、人名、曲名、キャラクター名、タイトル名、専門用語名の順に挙げられやすいことが明らかになった。なかでも、人よりも多く知っている自

信がある記憶は曲名と生物名であったことから、定型発達の大学生であっても、かなり専門性が高い知識を有していることが推察された。

また、AQ 得点の高い群と低い群を比較した結果、(定型発達の範疇ではあるものの) ASD 的な認知様式を持った人は専門用語名の優れた記憶を有意に多く持っていることが示された。このことは、ASD における専門用語知識の豊富さに通じる結果であり、先行研究を支持するものであると考えられた。

次に、カテゴリ分類だけではわからない、記憶内容の質的側面について分析を行った。調査によって収集された 912 個の記憶内容を分析対象とし、得られた結果は以下の 3 つである。大学生における「優れた記憶」の典型例を明らかにした。例えば「キャラクター名」においては「ポケモン」「アニメ・マンガのキャラクター」, 「地名」においては「世界の国名」「都道府県」が典型的, 「曲名」においては「曲名」「嵐の曲名」「乃木坂 46 の曲名」が典型的であった。「専門用語」に関しては ASD 的な認知様式を有する傾向が高いほど優れた記憶を有意に多く持っていた ($p < .05$) が、その記憶の内容には質的な差異は見出せなかった。

全体として、ASD 的な認知様式の度合いと優れた記憶内容とは関連が見られなかった。後述する文献研究の結果と合わせると、ASD 者の記憶の特徴は記憶内容ではなく、記憶の保持のされ方という側面にこそ現れる可能性が考えられる。

以上より、質問紙調査より、定型発達者の「優れた記憶」の特徴が明らかになった。これを予備的検討として、今後 ASD 者の「優れた記憶」との詳細な比較検討が可能となった。

表1 大学生の優れた記憶のカテゴリ

	一人当たり	
スポーツ人名	50	0.17
芸能人名	138	0.46
偉人名	15	0.05
知人名	15	0.05
人名その他	3	0.01
キャラクター名	123	0.41
団体名	22	0.07
曲名	131	0.44
タイトル名	90	0.30
作品中の固有名詞	17	0.06
地名	124	0.42
駅名	43	0.14
商品名	27	0.09
生物名	49	0.16
食物名	56	0.19
専門用語名	118	0.40
合計	1021	3.43

(2) 面接調査の結果

7 事例の語りの内容を整理し、事例研究の手法によりテーマを抽出した結果、7 事例中すべての事例において、「優れた記憶」が他の記憶とは異なる形で保持されていることが確かめられた。大別してそれらは 3 つのタイプ (音タイプ、静止画タイプ、動画タイプ) に分類された。上記 3 タイプのいずれにおいても、人生のある時期に一時的に自分が強く関心を持ったものに関する記憶であり、本人としては「覚えようとして覚えたのではない (= 自然に吸収した)」という受動的な主観的感覚を有している場合がほとんどであった。このことより、想起においてはフラッシュバックとの近縁性、記録においては言語獲得や技能習得のプロセスとの近縁性が窺えた。

この結果は、定型発達者の多くの人々が「優れた記憶」を有している可能性を示している。また「優れた記憶」は他の記憶とは異なる形で保持されており、これらの特殊な形態の記憶は従来 ASD 者の特徴と考えられてきたが、定型発達者もその種の記憶を有しているという仮説が生成された。

(3) 文献研究の結果

東田直樹の『自閉症の僕が飛び跳ねる理由』『自閉症の僕が飛び跳ねる理由 2』を精読し、ASD 者特有の記憶の仕組みという観点から読み解いた。結果、「点」の記憶、場面の映像としての記憶、無時間的な記憶、居場所としての記憶、記憶の受動性という 5 つの特徴が見出された。

(4) 臨床心理士への面接調査および事例研究の結果

ASD 者の心理臨床において、優れた記憶は必ずしも心理療法の中心テーマとはならないものの、時として優れた記憶を「窓」としてセラピストとラポールを形成する場面があることが明らかになった。ASD 者の心理療法経験から得られた記憶の特徴は 3 点である。幼少期の記憶が成人になっても消えていないこと、関心が向けられた記憶は正確かつ膨大であること、記憶想起時にはタイムスリップ現象に類似した意識状態になること、である。以上より、ASD 者は「今、ここ」において過去を現前させ、生き生きと体験することが可能であることが示唆された。ASD 者の主観的体験世界を理解するためには、この時間体験構造の独自性を踏まえることが必要であろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

川部哲也、自閉症スペクトラムにおける自伝的記憶についての臨床心理学的一試論 東田直樹の体験記述分析、大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科心理臨床センター紀要、査読有、11号、2018、11-17

川部哲也、既視体験（デジャヴュ体験）における1年後の記憶変化についての検討、大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科心理臨床センター紀要、査読無、10号、2017、21-29

〔学会発表〕(計 3 件)

川部哲也、自閉症スペクトラムにおける優れた記憶についての予備的検討(2) 大学生の「人より多く知っているもの」、日本心理学会第82回大会、2018年9月25日、仙台国際センター(宮城県仙台市)

川部哲也、自閉症スペクトラムにおける優れた記憶についての予備的検討(1) 大学生の優れた記憶の検討、日本心理臨床学会第37回大会、2018年9月1日、神戸国際展示場(兵庫県神戸市)

川部哲也、既視体験（デジャヴュ体験）の記憶は時間経過の影響を受けるか、日本心理臨床学会第35回秋季大会、2016年9月5日、パシフィコ横浜(神奈川県横浜市)

6. 研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。